様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　14　日現在

機関番号：52605
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520811
研究課題名（和文）中近世移行期における石見銀山開発に伴う地域形成

研究課題名（英文）The formation of regional characteristic of the area around the Iwami silver mine in the late 16th century and early 17th century

研究代表者
原田　洋一郎（HARADA　YOICHIRO）
東京都立産業技術高等専門学校　ものづくり工学科　准教授
研究者番号：90290725

研究成果の概要（和文）：本研究では、16 世紀半ばにおける石見銀山の本格的開発を契機として、新たな地域特性がどのように形成されたかについて、具体的な集落の事例を通じて検討した。銀山が盛大に開発された時代に交通・流通の拠点の機能を果たした集落が、その前代にあっては国人領主や土豪の本拠地であった例が多くみられた。そのような小規模なかつての中心集落を核とした局地的な交通・流通網が、銀山をめぐる交通・流通網の一部として組み込まれて統合され、銀山を中心とした新たな地域構造が形成されたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the process of the formation of regional characteristic of the area around the Iwami Silver mine in the late sixteenth century and the early seventeenth century, through the examination of the landscape and the social structure of the some individual settlement. It considered that the local regional structure of which the local central place, such as the home of the local powerful clan, was the core transformed into the traffic and the distribution channel for development of the silver mine.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：歴史地理学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：中近世移行期　石見銀山　地域形成

１．研究開始当初の背景

わが国の中近世移行期は、村落社会の構造、政治権力のあり方、都市の性格、都市と農村の関係など、さまざまな側面で大きな変化がみられた時期であった。この時代の特徴のひとつに、日本各地で金銀鉱山が盛んに開発されたことをあげることができる（小葉田淳『日本鉱山史の研究』、岩波書店、1968 年）。鉱山の大規模な開発は人やものの移動を活性化させ、鉱山町という、巨大な人口を抱えた居住空間を短期間のうちに成立させた。このような新たな中心地の創成は、地域にさま

ざまな変容をもたらしたものと考えられる。

石見銀山については、1996 年より、考古学、日本史学、対外交渉史など総合的な視点からの調査研究が島根県教育委員会によって組織され、 2007 年における「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産指定後も、同県教委が中心となって、最盛期の銀山集落の復原、16 世紀後半のアジア地域の鉱山との比較などを主なテーマとした研究が進められてきた。こうした一連の調査研究は一定の成果をあげていると思われるものの、石見銀山の世界遺産としての価値証明が主な目的とされていたこともあり、その焦点は銀山遺跡そのものや外港、そして、それらを結ぶいくつかの主要街道に限定されていた。この時期の鉱山開発のインパクトの大きさを考えるならば、鉱山の開発に際して、銀山周辺の地域もさまざまにこれと関わりつつ、同時にその影響によって、多くの面において少なからぬ変容がみられたものと考えられるが、その点については、ほとんど等閑にされたままである。

この時期における銀山の本格的開発によって、その周辺地域にいかなる変容が生じたか、あるいは、地域の特性が銀山の開発にいかに作用したか、といった、鉱山の周辺地域の側からの視点にたった具体的な検討は、未だ十分とはいえない。

２．研究の目的

本研究の目的は、16 世紀半ばにおける石見銀山の本格的開発を契機として、地域にどのような変化が生じ、新たな地域特性がどのように形成されたかについて検討することである。鉱業機能の集積地たる鉱山町そのものに関する、既往の研究成果なども参照しつつ、鉱山をとりまく地域全体の構造変化の呈示にまで至ることが、究極的な目標といえるだろうが、本研究は、その目標に向けて、既往の研究が著しく少ない、周辺地域の側からの検討事例を蓄積し、その必要性、有効性を示すことをめざしたい。

３．研究の方法

本研究では、江戸期における石見銀山御料に含まれる地域を一応の対象範囲とする。遠隔地に位置した久喜・大林や笹ヶ谷などの銀銅山や隠岐もその領域に含まれてはいたが、基本的にこの範囲は、徳川家による銀山領有以前より、銀山稼行に必要な物資の生産と供給において重要であった地域が、幕府領として設定されたと考えられるからである。

その中で、鉱山開発による変化がより明確に現れると考えられる、交通・流通の拠点や、新たな生産の場における、景観や社会関係の復原と検討に、とくに注目した。

本研究における検討の手順は、おおよそ以下のとおりである。

(1)「石見国正保国絵図」や、文禄期～天正期頃の状況を描いたとされる「石見国絵図」（宮城県図書館所蔵）などを参照して、江戸初期までに形成されたと考えられる交通・流通の拠点集落の分布状況、立地を確認する。地形図や現地観察によって、その景観上の特徴を把握する。

(2)それらの拠点集落の中から、資史料の残存状況などを考慮して、具体的な検討を行う集落を抽出する。今回は、浜原集落（邑智郡美郷町浜原）、温泉津集落（大田市温泉津町温泉津）、宅野集落（大田市仁摩町宅野）を、主な対象集落とした。

(3)具体的な事例集落の検討結果をふまえて、中近世移行期における石見銀山周辺地域の地域構造の変化について考察する。

４．研究成果

「石見国正保国絵図」には、「中通口番所」が描かれた村がある。たとえば、「中通大森上口」「中通大国口」「中通西田口」などである。これに対応するものとして、他領との境や海浜部に「外輪口番所」があることや、立地場所からみて、これらは御料内における交通・流通の拠点に置かれた番所であったと考えられる。1600(慶長 5)年、銀山が毛利氏から徳川氏へ移管されるにあたって作成された「子歳石見国銀山諸役銀請納書」に、「中通銀山近辺駄賃場役年中分」という項目があり、すでにこの時期には、そうした番所が置かれていたことがわかる。研究代表者は、以前に、こうした口番所が設置された集落の例として、西田村（大田市温泉津町西田）や荻原村（大田市水上町荻原）を取り上げ、その景観復原を行っ

たことがある（原田洋一郎、石見銀山周辺における「町」を持つ村に関する基礎的研究、東京都立産業技術高専研究紀要第4号、pp. 91-100、2010年）。

浜原集落は、それらの事例をふまえつつ、本研究では、交通・流通拠点集落の一事例として、取り上げたものである。この集落は、山間部の谷間を通って出雲方面へ至る主要な陸路と、江川との接点に立地していた。1602（慶長 7）年の「上澤郷濵原村屋敷御検地帳」によれば、「東町」「西町」という地名がみられる。江戸期には、「上市」「下市」といった地域区分もなされており、かつては市が立てられていたことがうかがわれる。その立地位置の重要性もさることながら、銀山周辺地域の多くが、16世紀半ば頃においては、国人領主、小笠原氏の支配地域に含まれていたのに対して、この地域は佐波氏によって領有されていたことも、従来の検討事例との比較において有意義であると考えられた。

度重なる江川の氾濫に洗われて、浜原集落の現在の景観には、古い時代の名残はあまり残されておらず、古文書資料にも恵まれているとはいえないが、この度の調査において、明治初期の地引絵図など、土地に関する基礎的な資料を収集することができた。これらを基図として、検地帳に記載された字名などを参照することによって、ある程度、集落景観を復原することができた。

また、郷土史家や寺院への聞き取り調査を通じて得られた情報との照合により、旧家の消息を、ある程度明らかにすることができた。たとえば、「子歳石見国銀山諸役銀請納書」に、「佐波より銀山駄賃役」として銀100枚を負担したうちの一人として記されている貝屋四郎左衛門という者が、この浜原の居住者であったことが明らかとなった。その屋敷地は、「町」の中ではなく、町に接する中世城館の麓に位置する字「土居」の周辺にあったことも判明した。字「土居」には、佐波氏の一族の者が居住していたとされており、その周囲に居住した者たちは、支配の側に立つ者か、少なくとも有力者であったと推測される。有力者の居宅が、「町」の外にあったことは、西田や荻原などでも確認されており、戦国末期頃にあっては、「町」は、交通、流通の拠点であったとはいえ、地域社会の中心という位置付けにはなかったといえそうである。

温泉津町では、主に社会関係の変化についての検討を試みた。温泉津は、中世にはすでに港町として広く知られており、16世紀半ばには、町衆ともいえる人びとの存在が確認されている。近世初頭の温泉津町には、「老中」とよばれる有力者の集団があったが、それらの多くは、中世末期の町衆の系譜をひく有力者であったと考えられてきたが、本研究では、集落内の古刹の過去帳や墓碑などに関する調査を通じて、それらのうちにも、中尾氏、増野氏などのように、比較的遅い時期に定着し、同一寺院の檀家としての結びつきを基盤とした、新たな社会勢力があったことを明らかにすることができた。また、村上氏や松浦氏など、近世初頭までは町の有力な構成者であったが、比較的早い時期に他地域に移住した者があったことも明らかになった。このような事実は、近世初頭の温泉津町の地域社会に大きな変化があったことを予見させるが、その具体相については、今後においてさらなる検討が必要である。

さらに、銀山の開発に関わって、新たに形成された集落の事例として、宅野の町を取り上げた。宅野村自体は、古代の郷名にもその名が現れるほど古い歴史を持つが、沿岸部に立地する宅野の町は、銀山への鉄の供給地として形成されたと伝承されてきた。このことについては、史料などによる明確な裏付けはなかったため、本研究では、まず景観復原や地名の検討、江戸期の同集落における商業活動のあり方の検討などを通じて、そのことについて検討した。その結果、宅野の町が中世以来の鉄の集散地として知られた出雲国杵築町との深い関係を有していたこと、町の有力者による江戸期における鉄の生産と流通への関与のあり方などからみて、この町が石見銀山へ向けられた鉄の集散地として成立、発展した可能性はきわめて高いという結論を得た。鉱山開発にとって、大量の鉄の確保は不可欠であっただけに、開発が本格化した時期に、鉄の生産、流通に関わる体制が整えられたと考えられるが、そうした営みの中で、宅野の町は形成されたと考えられる。

また、おそらくこの町の形成と関わって、

17 世紀前期に出雲国杵築町から移住してきた商家が、宅野に定着するに際して、久利村（大田市久利町久利）、尾波村（大田市大屋町大国）、大田北村（大田市大田町）の有力者と婚姻関係を通して結びついたことも興味深いことであった。これらの集落は、いずれも銀山と周辺地域を結ぶ街道上の要地であった。

本研究で具体的に検討できた集落は、わずかなものに留まるが、これらを通じて、大規模鉱山の本格的な開発という大きなインパクトによる新たな地域構造の形成過程の具体像の一端を明らかにすることができた。

銀山開発に際して、交通・流通の拠点となったり、場合によっては口番所が設置されたりしたような集落には、中世には国人領主や土豪の本拠地であったものが多く含まれていたとみられる。そのような集落は、銀山の本格的な開発以前には、小規模な中心地であり、もとより交通や流通の便に優れた立地条件を備えていたものと考えられる。それらが、交通・流通網の一部として組み込まれることで、銀山を中心とした新たな地域構造が形成されたと考えられる。

本研究で採用したような、周辺地域からの視点に立った研究成果がさらに蓄積されるならば、新たな地域構造の形成過程やその特質はさらに鮮明になると思われる。そればかりでなく、石見銀山の世界遺産としての意義付けがより強固なものとなるとともに、世界遺産の指定地域外に居住する住民の、銀山遺跡への関心と保全への主体的な取り組みを喚起し、その地域ならではの歴史をふまえた上での、魅力ある地域作りへのヒントを提供することができるといった波及効果も期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①原田洋一郎，石見銀山御料宅野浦における廻船商売に関する一考察，東京都立産業技術高等専門学校　研究紀要，第 7 号，pp.50-60，3 月，2013 年，査読有.

②田中達也，近世初期温泉津における景観と社会，大東文化大学紀要(人文科学)，第 51 号，pp.139-152，3 月，2013 年，査読有.

〔図書〕（計２件）

①原田洋一郎，『近世日本における金属鉱物資源開発の展開－その地域的基盤－』，古今書院，308p，2011 年.

②田中達也，『中近世移行期における東国村落の開発と社会』，古今書院，336p，2011 年.

６．研究組織

(1)研究代表者

原田　洋一郎（HARADA YOICHIRO）
東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・准教授
研究者番号：90290725

(2)研究分担者

田中　達也（TANAKA TATSUYA）
大東文化大学・経済学部・教授
研究者番号：50307138

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：